

ロック『教育論』加筆の社会史的規定

安 川 哲 夫

Locke's *Education* in Context in the Social History —An Analysis of Additions after the Publication of the 1st Edition—

Tetsuo YASUKAWA

はじめに

ロックの『教育論』（初出1693年）は、彼がオランダ亡命中（1683—89）に友人に書き送った教育私信を一書にしたものとされている¹⁾。ロック自身、「献辞」の中で、この書は「書簡以上のものではない。…順序を変えた以外ほとんど変更しなかった」と述べていた。しかし初版のそれは、1684年以前の「草稿」からも多く構成され、またロック存命中の最後の版である第五版（1705年）には大幅な加筆がなされていた²⁾。前者についてはマッソンの詳細な書誌学的研究があるのでそちらに譲るとして³⁾、ここでは主に後者に関してロックの教育思想の発展を追いたいと思う。

単純にいま現行の子育てや教育に対するロックの批判を第一版と第五版とで比較すると、そこに我々は次のような重大な変化があることに気づく。それは、前者が、ロックが青少年時代を過ごした17世紀中葉の、子どもと距離を置く権力的な父子関係や体罰に基づく伝統的な教育方法に力点をおいていたのに対し、後者においては、次の世紀において問題とされていく寛大な子育て方式やベタベタした母子関係、それに学校教育へのより一層の傾斜という教育の新動向に批判の焦点が合わせられていたという事実である。

こうした変化ないし加筆の先進性はこれまで明瞭に意識されてこなかった。これには加筆が第一版の構成に従って行われ、最終の第五版が今日標準的なテキストとして使用されていることも大いに関係していよう。がしかし、筆者はこれはロック『教育論』に対する従来の接近態度そのものに根本的な原因があったと考えている。というのは、『教育論』がその時代その社会における具体的な教育問題に答えた時局的作品であるにもかかわらず、多くの研究者たちはもっぱら『人間知性論』や『統治論』の著者としてのイメージから接近し、『教育論』とそれらとの理論的整合性を求めようとしてきたからである⁴⁾。こうしたアプローチが全くの間違いだと言うのではない。しかしかかる接近方法から得られた読解は、ロックの問題関心の本質を何ら明らかにしていない点で不十分であると言わざるを得ない。『教育論』を歴史的社会的文脈において把握しようとする狙いの一つがここにある。

社会史的方法を採用するに至ったもう一つの、より積極的な理由は、第一版の基になった「草稿」や「書簡」が内乱・王政復古・名誉革命に至る一連の政治的混乱の中で（しかもオランダ亡命中に）書かれたのに対し、1695年の第三版から始まる加筆が政治の問題が理論的にも現実的にも一段落した時期になされていったと

いう事実と深く結び付いている。上述の現行の教育に対する批判の力点変化からも窺われるように、ロックの問題関心は、この歴史的变化の中で、第一版構想時と加筆時とでは大きく変わっている。つまり、家長の権威の内面化と支配能力たる「自制力」の訓練を通してジェントルマンを教育し、よって社会秩序を再建していった初期の課題からの発展がそこに横たわっているのである。この教育課題の発展過程を、17世紀後半から進行し、ジェントルマン支配の安定化の中で加速された「衛示的消費」(conspicuous consumption)に生きがいを求める生活スタイルの一般化とかかわらせて解明し、先の論文で提示した近代教育の自己変容⁵⁾がすでにロックにおいて先取的に問題とされていたことを示そうとするのが本稿の目的である。

I 「伊達男」ではなく「実務家」を ——消費社会の成立と寛容な子育て に対するロックの批判——

ロックが第三版以降加筆訂正していった箇所は総計32節に及ぶ。今それを内容に従って分類すれば、以下ようになる（数字は第五版の節ナンバー、また〔 〕で示した数字は新たに追加された節を示す）。

①社会や家庭生活の変化に関するもの

13, 14, [37], 108, 130, [205], 207.

②教育の方法に関するもの

[62], 66, 80, 98, 176.

③家庭教育（教師）に関するもの

70, 88, 89, [93], [94], [98], 167, 168, 189, 195.

④社会的徳に関するもの

66, 67, 106, 107, 108, 110, [115], [117], 143, 145.

⑤カリキュラムに関するもの

161, 180, 192.

この分類からも伺われるように、加筆におけ

るロックの関心は、家庭教育に関する問題と社会的徳の教育に関する問題に集中している。加筆量もこれら二領域が他を圧倒している。その検討は後に譲るとして、ここではまずこれらの問題をクローズアップさせることになった①の社会および家庭生活の変化に注目しておこう。

すでに多くの社会史の研究成果からも明らかのように⁶⁾、ピューリタンの宗教戦争の嵐から解放されたイギリス社会は、17世紀後半、「商業革命」「生活革命」「衣料革命」と称される高度な消費経済成長時代を迎えていた。上流階層の生活水準は上昇し、新しい趣味はロンドンから地方へと波及し、中小ジェントリや富裕な商人階層にも及んでいた。人々は邸宅を増改築し、贅沢な生活習慣を維持することに躍起になっていた。こうした「消費社会」(consumer society)の到来は、生まれや家柄ではなく、生活スタイルでもってその人の社会的なステイタスを決定する「マイ・フェア・レディ型の社会」(川北稔)の成立を告げていた。ロックが加筆に際して前提としていたのはかかる社会の変化であった。

ロックによれば、当時「最新流行の人々(A-la-mode people)」は、舶来品を好み、服装や食事に金をかけ、また「気晴らし」と称しては余暇を博打や賭博といった娯楽(レジャー)に費やす最先端の物質的生活様式を作り出していた。そして他方で彼らは、宮廷人のごとき上品な態度や洗練された立ち居振る舞いを身に付けては、田舎のジェントルマンたちの伝統的な行動様式を「ダサイ」(Clownishness)と侮り、学問を社交の道具としてファッション化していた(cf. §§67, 108, 130, 205, 207)。こうした斬新性とファッション性に価値基準をおく、「伊達男」(Beau, §9)と呼ばれた一群の「廷臣」(Courtier, §145)の亜種たちの大流行は、必然的に、親密圏として画される家庭生活にも大きな影響を与えていた。

例えば、新たに追加された第37節において、ロックは当時起こった家庭生活の変化を次のように語っていた。「自分たちの財産で比較的裕福

に暮らしている人々の家」では、「食べたり飲んだりすることが人生の大きな仕事であり、また人生の幸福とされている」。そのため彼らは「当世風の食卓」(fashionable Table)を好み、流行の飲み物となっているフランス産ぶどう酒を飲み、肉に外国産の香料をかけて多量に摂取する。そして食卓で子どもたちが少しばかりぐずっていると、親たちは「坊や、何を食べたいの」「何か取ってあげましょうか」と尋ね、彼らが美食家となるように仕向けていく。親たちはまた本来礼儀と身を守るためのものである衣服を「虚栄と競争の道具」にして、幼いうちから少女を新しいガウンやシルクのレースで覆われた髪飾りで飾り立て、「私の小さな女王様」とか「私の小さな王女様」とか呼ぶことによって「外面的な流行」(out-side Fashionableness)で自分自身を評価することを教え込んでいる、と。

加筆において強調された親の甘い対応は、すでに第一版においても分散的に記されており、子どもたちの生活全般に及んでいたことが分かる。例えば親たちは、寒かろうということで子どもに厚着をさせ (§5)、日焼けは「伊達男」には似つかわしくないという理由で戸外で遊ばないように勧め (§§9-10)、いい容姿を作るために少女の身体をコルセットで締め付け (§11-12)、週二回肉を食べる自分たちの習慣から子どもにも肉類を過剰に摂取させ (§§13-14)、ぶどう酒を飲ませ (§19)、羽根布団に寝かせ (§22)、具合が少しでも悪かろうものなら直ぐに薬を投与する (§29)。更に彼らは、子どもを「玩具」(plaything, §35)あるいは「ペット」(Fondling, §70)とみなして「むやみやたらと可愛がって強く抱き締め」 (§11)、また「子どもたちに逆らってはいけない。彼らには何でも思い通りにさせてやるべきだ。幼児期には大した悪事は出来ないのだから、少しぐらいだだをこねてもかまわないし、またあの無邪気な年頃にはよくあることだから、かなりの強情さでじゃれついてもかまわない」 (§34)という考えから、子どもがせがむに任せて次から次へと沢山の新しい種類の遊び道具を買って

やり (§130)、ぐずついたり勉強を嫌がったりすれば、りんごやボンボン、レースの襟飾りやフランス仕立てのスーツ、それにおいしい御馳走やおもちゃなど、子どもが欲しがるものを苦労や勉強の報酬として与えていた (cf. §§53, 90)。

かかる親たちの子育て実践が、アリエスの言う「子どもへのまなざし」の発達の結果として生まれてきたのか⁷⁾、また子ども・家族史家たちが指摘しているような親子関係や子育ての歴史の「一大転換」をなすのか⁸⁾、この問題はここでは留保しておこう。ロックに関して言えば、彼は明らかにそうした子育てが親としての「自然の情愛」から大きく逸脱したものであること、否、子どものために願う心遣いからではなく、ファッションや消費をステイタス・シンボルとする親たち自身の虚栄とプライドから発していることをはっきりと読み取っていた。彼は言う。

「私はしばしば大きな驚きをもって次のことを見てきた。それは、人々がなりふり構わずお金を使って子どもたちを立派な服装で飾り立て、贅沢な家に住まわせ、豪華な食事をさせ、役に立たない召し使いを必要以上に彼らに付け、しかも同時に彼らの精神を飢えさせ、生来の悪い性向や無知といった最も恥ずべきありのままの姿を覆い隠すことに何ら十分な世話をしていないという事実である。私の見るところでは、親たち自身の虚栄心のために子どもが犠牲にされている以外の何物でもない。親たちが行っていることは、子どものために良かれという真の気遣いではなく、彼ら自身のプライドを現している。」 (§90, 強調点は引用者)

ロックが言わんとするところは明瞭である。だがかくもジェントルマンの親たちが、子どもを「犠牲」にしてまで「プライド」を顯示することに熱心であったのは何故だろうか。そのメンタリティを理解するために、我々はここで『教育論』の対象となっているジェントルマンについて一言触れておかなければならない。

良く知られているように、ジェントルマンと

称されるのは、爵位をもった貴族と四つの階層（バロネット、ナイト、エスクワイア、それに単なるジェントルマン）に序列付けられたジェントリたちである。ロックが貴族子弟の家庭教師を行ったことは有名だが、『教育論』が念頭に置いているのは貴族身分のジェントルマンではない。「王子、貴族、通常の (ordinary) ジェントルマンの子弟にはそれぞれ異なった躰の方法が採られなければならない」 (§216)——このことは彼にとって十分過ぎるほど明らかなことであった。彼が意図したのは、「通常のジェントルマン」すなわち「イギリス・ジェントリに適した教育論」（献辞）を書くことであった。

『教育論』で一般に用いられている「ジェントルマン」はジェントリ身分にあるジェントルマン、それも1688年に作成されたグレゴリ・キングによる階層区分表に従って厳密化すれば⁹⁾、ジェントリの中でも多数の家族から構成された小ジェントリと呼ばれる下位の二つの階層であったと推断される。だとするならば、彼ら中小地主＝小ジェントリが、この時期、「虚栄心」や「プライド」から贅沢な生活習慣の維持に躍起になり、子どもへと向かわざるを得なかったその理由は比較的容易に理解されるように思われる。というのは、17世紀後半から18世紀前半にかけてのこの時代は、ハバカクの「テーゼ」に従えば、対仏重商主義戦争遂行のために国家が行った財政改革によって、爵位貴族とジェントリ最上層部を中心とする大地主が一層の土地集積に成功し、他方でジェントリを核とする中小地主やヨーマン、自作農らが没落していった時期に当たっているからである¹⁰⁾。

小ジェントリは二重の危機に直面していた。彼らは、大地主貴族や大ジェントリが領地を拡大して他の階層との溝をますます広げていったのとは対照的に、その政治的な影響力は周辺的なものに限られ、また地代に対する重課税によって経済的にも圧迫されていた。そして他方で彼らは、財政確保のために発行された国債や有価証券を買って莫大な富を築いた商人、法律

家、聖職者、医者たちが「新興地主」（ニューメン）として台頭していくのを目の当たりにしていた。かかる状況下にあって、彼らが地位と社会的威信を保ち、かつロンドンの社交界に入っていくための手段は、ロックの言葉を用いれば、「最上流の人々によって大いに認められ、あまねく実践されている贅沢」を共有して「立派な生活をしている」 (Living well) という評価を獲得していくか (§37)、あるいは子どもを教育して家族の名声を高めていく以外、何も残されていなかった。

以上のような「消費社会」の成立と地主社会の構造変化を前にして、ロックはあの有名な、ジェントルマンよ、「実務家」 (Man of Business) たれ、またそのように息子を教育せよ、という命題を掲げ、ジェントリの親たちの生き方と教育実践を批判するのである。彼は言う。「世間で何がしかの出世をしようと欲する」 (§3) ジェントルマンは、身体教育においては「正直なファーマーや裕福なヨーマンが行っているのと同じように、その子どもたちを扱い」 (§4)、また精神教育においては「通常の方法とは逆に、子どもたちが、ゆりかごの時代からさえ、自分の欲望に従わせ、憧れを持たずにやっつけられるように慣らされるべきだ」 (§38、強調点は引用者)。そしてそのためには、土地や威信や対面の保持のための出費よりも教育に「投資」し、「立派な家庭教師」を雇って子どもを教育せよ。これが「良き家政」であり、ひいては公共の福祉と繁栄に寄与するのだ、と。

この提案の重要性を強調するために、ロックは現行の方法によって引き起こされてくる様々な弊害を力説していく。まず母親の溺愛によって子どもたちの体質はスポイルされ、精神的にも「贅沢で、自惚れ強く、強欲な」 (§52) 存在になっていく。と同時にそれに応じて親たちの不満や嘆きも大きくなっていく。彼らは、子どもたちにわがままな行動や気紛れが目立ち始めると、体罰や禁止による方法に訴えかけ、それでも駄目なら「うちの小僧ときたら全く手が付け

られない強情な奴だ」と不満を述べ、ついには頭を抱え込んで途方に暮れる (§35)。こうした親たちの不平や嘆きに対するロックの対応は手厳しい。彼は言う。それは自らが蒔いた種だ。「子どもがぶどうやあめ玉を欲しがった時にそれらを与えておいて、それでいてなぜ彼が成長してワインや女を欲しがった時、それを満足させてはならないという理由が成り立つであろうか」と (§36)。

問題が単に一家族、一親子関係にとどまっている限りでは、事はそれほど重大ではない。ところがそこから発する青少年の早期の墮落は時代をおうごとに大きな社会問題と化していく。第三版以降の加筆箇所 (第70節) でロックはこう言う。「流行の伝染病」によって「悪徳は今日ものすごい勢いで大きく」なり、「ここ数年の間で我々の間にはびこる」までになってしまった。その結果、イギリス人の国民的特質とされてきた勇気や名誉の観念は喰い尽くされ、「規律の束縛」は弛緩し、国家の安全そのものも脅かされない状態となってきた。「最近海上で起こった出来事」(1695年のフランスとの海戦によるイギリスの敗北) を見よ。これはひとえに近年の誤った教育によって好き勝手に育てられてきた若者たちの放蕩や放縦によっている。「私が望むのは、キリスト教の敬神と徳が至る所ですたれ、かつ当代のジェントリに学識と獲得された改善がなくなったと嘆く人々に、どうやったら次世代に失われたものが取り戻せるかを考えてもらうことである」と。

消費生活習慣の流行と家庭での寛大な子育て、それにこれらの結果としてもたらされてきた若者の放蕩、こうした新たな事態の進行にロックは社会の秩序維持の危険性を求めている。この立場は『教育論』と同時期に著された『利子・貨幣論』(1692年)においても繰り返されていたが¹¹⁾、これが、次章以下に見るように、消費社会のエートスや流行の教育に対する批判をますます強化させ、第三版以降に新たな視座を導入させることになる。

II 近代人の二重性と教育 ——「気取り」批判 (§66) を中心として——

まずは第66節の加筆を見ておこう。この節はもともと反復練習による習慣形成の注意点を説いただけの短い一文でしかなかった。が、ロックはその後大部の加筆をなした。加筆は、大別すれば、子ども研究の重要性に関するものと「気取り」(Affectation)に関するものに二分される。一般には、前半の子どもの特性に合致した教育方法の提唱に目が向けられがちであるけれども¹²⁾、加筆全体の重心は明らかに「教育固有の誤り」である「気取り」について論じた後半部分にある。彼はここでこれまで展開してきた規則と訓戒による画一的な教育方法に対する批判から一転して、当世流行の新しい教育様式、つまり、「人に気に入られること」「人を喜ばす上品さ (Gracefulness)」を至上目的とする教育に対する批判へと向かう。そしてこの批判において、近代人の自己疎外という新たな観点を導入し、問題解決のために次章以下で述べる一連の加筆を行っていく。この点で第66節の加筆とそれと直結している第67節の「作法」に関する加筆は特に注目に値する。

さて、ロックによれば、育ち良き人間という評判を得んがために人々が動作、行動、言葉、外見のすべてにおいて行う「気取り」は、今やジェントルマンの社会的な風潮となってきた。子どもでさえも「現在考えられているよりもずっと早くから大人であろうと気取る」 (§71)。イギリス人特有の精神的態度と評されるスノビズムの原初形態がここにあるが、ここで重要なのは、ロックがそれを生得的なものとしてではなく人為として捉えていることである。つまり彼によれば「気取り」は、「何の教化も受けていない (untaught) 自然の産物や未だ開墾されていない (uncultivated) 野生の荒地に生えてくる雑草のごときもの」ではなく、「誤った (mistaken) 教育」や「悪用された (perverted) 教

育」の結果なのだ (§66)。

ロックは言う。気取りにおいて目的とされている「上品さ」は、本来、「人間的で、親しみのある、礼儀正しい気質」あるいは「寛大で、自分自身と自分の一切の行動を律し、卑しくもさしくもなく、高慢でも横柄でもなく、いかなる重大な欠陥によっても汚されていない精神」から自ずと生じてくる外的な表現である。それゆえそれは、人をその行動において光り輝かせ、すべての人々を魅了せずにはおかない「美」そのものとなる。ところが人々は、その基盤の誤った解釈に立って、「上品さ」が依拠している内面を開墾し (cultivate), 形成し (form), 研磨し (polish), 仕立て上げる (fashion) ことをしないで、ただ外面に現れた「美」や「流行」だけを身に付けることに懸命になっている。「気取り」はこの結果としてもたらされてきた「内的精神」(Mind within) と「外面的な行動」(outward Action) との不一致に他ならない。従ってそこには常にぎこちなさと下品さ (Ungracefulness) が付きまとい、結局は居心地が悪い。更にもっと悪いことには、「上品さを装うと努めれば努めるほど、人はそれから遠ざかっていく」。

「気取り」と最新流行の教育に対する以上の批判には、「内面」(in-side) と「外面」(out-side), 「存在」(what lies at the bottom) と「外観」(appearance), 「素顔」(what they are) と「仮面」(Mask, §94) とに引き裂かれた近代人の二重性についての人間学的な考察がある。人間は近代以前においては自己の存在と生き方を生まれながらに規定されていた。しかし物質的な消費社会が成立してくるに及んでこの精神的な価値体系は瓦解し、人間は他人の意見や評価の中でしか自己の存在や地位を確認できなくなってくる。近代人にとっては、他人が魅了されている外見を我がものとする以外に現実には存在しないし、何らかの物質性を備えたものを欲望することによってしか、その存在を確認する手立てをもちえないのである。その意味で、斬新性や流行を追い求め、他人から良く思われたいと

いう欲求から現れてくる「気取り」は、存在から価値（意味）を剥ぎ取られた近代人特有の精神的態度の一つと言って良い。これはある時には消費活動に、またある時には行為の形成に、更には精神活動には切っても切り離せない言語の獲得に向けられたりするが、だがそうした欲望に突き動かされて外見の開発を押し進める結果どうなるか。人間はますます存在と外観の分裂を際立たせていく。しかも欲望は決して完結することがないので、その裂け目はいよいよ深く大きくなっていく¹³⁾。

この問題は、第一版出版時のロックにおいては、必ずしも十分には自覚されていなかったように思われる。欲望の問題が捉えられていなかったというのではない。子どもの「不規則で無秩序な欲望」 (§39) をいかにコントロールし、理性に従わせていくかという点では、彼の教育論は欲望のガヴァメント化論として展開されていた。そして彼はこれを親子間の権威一服従の関係の整序という方法によって達成できると考えていた。しかしそこではまだ、「気取り」といった欲望から人間が「存在」と「外観」に、またその社会的な表現である「人間」と「市民」に分解していく契機は十分に把握されていなかった。加えて人間の分裂から社会秩序の危険性を見通していく認識も希薄であった。近代人が陥る自己疎外とそこからもたらされる近代社会の問題をロックをしてリアルに把握せしめたのは、亡命から帰国して彼が見たところのイギリス社会の実際の進展状況であった。彼はここに教育の新たな課題を求めた。というのは、何とかその裂け目を塞ぎ、疎外からの克服の道を探ろうとする試みは、生きる意味を生み出してくれる新たな目的に向けて生活や行動様式を理性的に組織化し、その形式へと子どもを教育していく精神的な訓練による以外、道は残されていないからである。以下に列挙した第三版以降の一連の加筆訂正は、人間に分裂をもたらしていく欲望を抑え、欲望の限界としての形式を身に付けさせるためのそうした試みの一環に位置し

ている。

①第67節における作法の教育の方針変更。彼は、第一版では、上品な立ち居振る舞いはダンスを習えばやがて身に付くのでそれほど気にかける必要はないと忠告していた。が、この方針を加筆においては「独り歩きが出来るその最初の瞬間から」十分に注意せよと変更する (§67)。

②「自然の欲求」(wants of nature)と「気紛れの欲求」(wants of fancy)との峻別、および前者の助成と後者の抑制による教育の強調 (§§106-108)。後者が第一版 (§102) で「気取り」と並置されていたことに注目。

③「気前の良さ」(Liberality)の教育の重視 (§110)。彼はここで利己心を人間の行動の源泉として明確に位置付け、それを制御していくために正義と所有権との関係を強調し、所有権の明確な概念を形成していくことの重要性を訴える。

④「良き躰」や「礼儀正しさ」の教育の必要性の強調 (cf, §§115, 117, 143, 145)。これについてはIVで詳述する。

⑤「真の生活」を営む上での「気晴らし」の活用 (§108)。

⑥勇氣や臆病など、人間が社会で生きていくのに求められる資質に関する教育の重視 (§115)。これは全面追加されたものの一つである。

⑦身分の低い者たちへの愛情の必要性について (§117)。これも全面追加。

ところで、ロックは、第一版では、欲望のガヴァメント化の役割を、市民社会の原理からの規範的な要請として、全面的に父親に担わせていた。社会の代行者としての父親は、社会の秩序意志や徳を一身に具現化した存在＝「実例」として子どもの前に現れてくることが期待された。家庭教育はこの限りで人間＝市民の形成の理想的な教育形態であると思われた。しかしながら、人間に対する市民の優位の風潮の中で、ジェントルマン階層の間で子どもを外に出す傾向が活発化していくと、ロックが第一版で当然のごとく前提とした家庭教育論も新たな対応を

迫られていくことになる。少々先取りして述べておけば、ロックはこの動向に理論的な対決を行うことによって自己の家庭教育の枠組みと構造を補強・改編し、新たなジェントルマン教育論を展開していくことになる。そこで次に、加筆全体の中でも特に重要な意味を持つ第70節と、それと密接に関連している第93・94節の全面追加を検討することにしよう。

III 教育の新動向とロックの批判 ——「学校教育か家庭教育か」 (§70)——

教育の歴史上、ロックの家庭教育の提唱はつとに有名である。だがこれが、18世紀を通して盛んに論争されていったようなパブリック・スクールでの教育との自覚的な対比において展開されるようになったのは、第70節の加筆においてであった。というのは、この節は、もともとは、子どもは「常に身近にあるものの色に染まる一種のカメレオン」であり、かつ「聞くものよりも見るものの方をより良く理解する」 (§67) という認識を踏まえて、事例とりわけ仲間が子どもたちの態度形成や行為形式の獲得においていかに大きな教育力をもっているかを論じた議論の一つでしかなかったからである。その限りで言えば、彼自らも述べているように、「仲間は一切の教訓、規則、指図より役立つ」 (§70) と規定した時点でこの節は完結していたはずであった。ところが、そうやって仲間の重大性を強調した途端、ロックには次のような疑問が寄せられてくるのが予測された。

「息子をどうしたら良いものだろうか。いつも家の中に閉じ込めておけば、若殿になる危険性があるし、かといって外に出せば、至る所で流行っている不作法な行いや悪徳からの感染を防ぐことができなくなる。家にいれば恐らく彼は比較的無垢のままでいられるであろうが、その代わりあまりにも世間知らずとなってしまうであろう。しかも家の中では同じ顔ぶれに慣れきってしまい、友達もいない

ので、外へ出た時、彼はおどおどするか (sheepish) あるいは自惚れの強い人間になってしまうであろう。」(§70)

第一版公刊時においてはロックはこれに明確な答えを準備することができず、ただ次のように言うにとどまっていた。

「双方どちらにも不都合があることを私は認める。しかし家にいる間は、訪問してくるあなたの仲間や生まれも躰も良い人々からなる仲間とできるだけ近づけよ。そうすれば召し使いや身分の卑しい人たちの悪影響から遠ざけておくことができよう。もっとも息子を外に出すか、あるいは家にとどめておくかは、両親の都合や環境に委ねられなければならない。しかしこの点に関して言えることは、親の目の届く家庭で、立派な家庭教師を付けて躰する方法が最善ということである。もっともそういう人物が得られて、しかるべく命ぜられるならばであるが。」(第一版、第68節)

ロックを有名にした家庭教育の主張が以上のような簡単な叙述で終わっていた事実は少々驚きである。なぜ家庭教育が優先されなければならないのか。「双方どちらにも不都合がある」と言われる場合のその「不都合」とは一体何なのか。「立派な家庭教師」とはどういう人物であり、親は彼をどこで、どのようにして見つけければ良いのか。これらは第一版を読めば必ず生じてくる疑問である。この点でロックが質問を受けたかどうかは分からない。が、「双方どちらにも不都合がある」以下の大幅な加筆はそのことを暗示させるし、またそこで展開された議論には第一版からのロックの思想の発展が伺われる。

では、この節を全体の流れから大きく逸脱させるまでにクローズアップさせ、ロックをして「学校教育か家庭教育か」という二者択一的な問題に収斂させていった誘因は一体何であったのであろうか。

我々がまず注目しなければならないのは、17世紀後半から18世紀を学校教育の衰退＝家庭教育の隆盛の時代として捉える従来の通説（ブラ

ウアー、ハンス、マスグローブ他）に反して¹⁴⁾、この時代すでにジェントルマン階層の間に学校への奔流現象が起こってきていたという事実である。例えば、1680年以前の生まれの貴族のうち、イートン、ウェストミンスター、ウィンチェスター、ハローといったパブリック・スクールに通ったのはわずか16%にすぎなかったが、その比率は1681—1710年に生まれた人のうちの35%、1711—40年に生まれた人の59%、1740年以後に生まれた人の72%へと増大した¹⁵⁾。恐らく、貴族の生活・教育様式を模倣することに懸命であったジェントリ階層もこれに追従したと思われる。

こうしたジェントルマン階層における家庭から学校へのシフトの移動には、自由で開放的な市民社会の成立によって、親たちが子どもに期待する人間像が大きく変わってきたことが考えられる。母親たちが「伊達男」をモデルに子どもを育てていたように、当時息子の教育や職業についての専決権を有していたジェントリの父親たちも、ロックによれば、次のような「思い違い」をしていた。つまり、彼らの多くは、

「大胆で騒々しい人々 (bold and bustling Man) によって財産が最もうまく形成されていくのを見て、息子たちが早くから生意気で出しゃばり (pert and forward) になっていくの喜び、またそれを彼らが金持ちになっていく喜ばしい前兆であると受け取って、学校仲間に対して仕掛けたり彼らから覚えたりする策略を、世渡りや出世の術にたけたものと思ひ込んで」いた (§70)。

かかる「思い込み」は理由のないことではなかった。大都市ロンドンへの人口集中と貨幣経済の発達、それに「疑似ジェントルマン」の広汎な出現は、伝統的な階層序列の権威関係をつき崩して個人の匿名化を進行させ、ジェントルマンの価値観と生き方を一変させていた。そうした時代の流れの中であって、人々が社会で成功する決め手は、ひとえに彼が座を賑わすことによって自己を他から際立たせ、そして奸智に

たけ、高官連の機嫌を取ってパトロネジを拡大し、多くの人々から尊敬と信望を獲得することにかかっていた。「謙虚」「慎み」「実直さ」は、かつては有徳的な人間としての評価を獲得するための必須物であったかもしれないが、しかしこうした人間は今では融通のきかない「野暮な」人間として烙印を押され、政治、経済、文化の中心である社交界から姿を消していかざるを得ない運命にあった。

復古後の教育理論もこうした風潮に加勢していた。例えば、当時ジェントルマン階層の間で最も多く読まれたフランシス・オズボーンの『息子への助言』（第一部1656年、第二部1658年）は、「教育の目的とは、有益な情報や仲間を自分に都合良く、巧妙に扱う能力を育成することにある」と規定して、出世の手段としての教育の効用を説き、特にパブリック・スクールでの教育を、仲間同士で果樹園で盗みを働く際に知らず知らずに得られる計画立案能力や注意深さ、秘密の厳守、用意周到さといった能力育成の観点から高く評価していた¹⁶⁾。

学校教育への傾倒は、更に文学史上オーガスタンの時代と称される新古典主義の台頭によっても促されていた。ロックは、別の加筆部分において、「ラテン語や学問にすべての人々が大騒ぎをしている」現実を指摘しながら、「上流身分の、しかも能力のある人々が、慣習や盲目的な信仰によってかくも誤り導かれているのは少なからず驚きである」と正直に語っていたが (§94)、この時期、学問とりわけ古典的教養は、最新流行の生活・行動様式と並んで、ジェントルマンには欠くべからざる「ファッション」の一つとされていた。このため人々は古典語を教えてくれる学校に子どもを送り始め、また仮に家庭で教育する場合でも、「学識豊かな人間」を家庭教師を選ぶ際の基準としていた。

「学校教育か家庭教育か」という問題は、ロックにあっては、17世紀後半に現れ始めた上述の教育の新動向が自覚的に捉えられたところに成立した。このことは、第70節の加筆部分におい

て彼が真っ先に行ったのが、当時オズボーンらによって強調されていた学校教育有効性論—「外に出ていると、少年たちは自信をつけてより大胆になり、同年齢の少年たちの中に混じって騒ぎまわったり、また世間でやり繰りしていくことが上手にできるようになる。しかも学校仲間との競争が彼に活気と勤勉を植え付けてくれる」 (§70)—に対する批判的吟味であったことから明かである。これを今第70節の加筆に従って要約すればこうなる。

なるほど学校教育にはそういう一面もあるかもしれない。しかし、学校仲間たちとの交際から獲得される「大胆さや気概」、「図々しさや策略」、「やり繰りする術 (Arts of Shifting)」や「他人の中でにぎわう術 (Skill of bustling)」は、粗暴と誤った自信の混合物で、「市民的交際とビジネス」に生きるジェントルマンには「ふさわしくない腹黒いやり方」だ。それらは「立派な生計を立て、自己の日常業務を処理していく技量」とも対立する。「有能な人間を作るのは、学校仲間たちの間で実践されている賭け事やいかさまではないし、また一緒になって果樹園で盗みを働くために十分に練られた策略でもない。それは、観察と勤勉とが結び付いた正義 (Justice)、雅量 (Generosity)、中庸 (Sobriety) の原理であって、こうした資質は、判断するに、学校の生徒が互いに学び取ることがないものである」。

ロックはまた、学校教育論者から家庭教育の欠陥としてしばしば指摘される「優柔不断 (sheepish softness)」、「はにかみ (Sheepishness)」、「内気 (Bashfulness)」、「世間知らず」についてもこう反論する。これらは家庭で養われてきた必然的な結果でもなければ、また仮にそうだとした場合でも、救うことのできないような害悪でもない。なぜなら、「男らしい態度や落ち着き」および世間の知識は、世間に入って人々と交際すれば自ずと身に付いてくるからだ。従って、自信を付けさせ、処世の術を獲得させるために、わざわざ育ちの悪い不道德な少年と交際させて

無垢な心を犠牲にすることは全く馬鹿気ている。「教育において目指されることが困難で価値ある部分は、徳、直接的な徳であって、出しやばりの生意気さ (forward Pertness) ややり繰りする些細な術ではない。他の全ての配慮や嗜みはこの徳に席を譲って後回しにすべきである」と。

第70節の加筆の中心的議論は一応ここで終わっている。そしてそれに続いて「父親の目の届く家庭で、立派な家庭教師を付けて教育する方法が最善」という第一版の結論を、「同時にまた最も安全な方法である」を追加して繰り返し、その具体的な方法として、親は訪問客の接待や隣人の訪問の際には必ず子どもを同伴することを提案する。そして最後に改めて教育＝養育こそ父親としての「良き家政」であり、息子に残してやれる「最良の遺産」であると主張する。結論部分は同じでも、第70節の加筆には問題への接近態度に著しい深まりが見受けられる。なぜなら、学校教育と家庭教育の両者の長短を詳しく検討することによって、ロックはそこにジェントルマンに本当に必要とされる資質は何かという問題を提起し、既存のジェントルマン概念の修正を迫っているからである。

ロックの家庭教育の主張は、一般に言われているような、既存の伝統的な学校教育に対する批判から導き出されてきたものでも、また親子関係の理論から論理内在的に引き出されてきたものでもない。それは、理論と現実とにおいて当時流行となりつつあった学校教育への傾倒を、理想的人間像に照らして批判するところから導かれてきた、ジェントルマン教育の新たな対抗理論の提示であったのである。

しかし以上で問題がすべて片付いたわけではない。ロックの提唱する教育の成否は、一にも二にも、「立派なジェントルマン」を形成することのできる「立派な家庭教師」を手に入れることにかかっている。だが何をもって「立派な」教師であると判定すればよいのか。ロックは、世間で採用されている「学識豊かな実直な人間」

という基準だけでは不十分である、と言う。なぜ「不十分」なのか。彼はただ、「立派な家庭教師」は「どこにでも見つけれられるものではない」ので、選択にあたっては「息子の嫁を選ぶ時と同様の」細心の注意をせよ、と警告するのみである (§§90-92)。こうした家庭教師の選択基準についてのあいまいさが、先のジェントルマン概念の修正と相俟って、やがて家庭教師に関する第93・94節の加筆を導いてくる。

IV 「礼儀正しさ」と「知恵」の教育 ——教師論 (§§93-94) を中心として——

第93・94節は一般には教師論として読まれている。確かにそうだ。しかし、教師の資質がそこで目的とされる理想的人間像によって決定されるとするならば、第一版の「真面目さ、節度、優しさ、勤勉、思慮分別」 (§90) とは異なる資質を要求した加筆には、「善良で、有徳で、有能な人間」という第一版のジェントルマン理想からの発展が伺われるし、また教育の質的な変容が予想される。こうした視点から、以下、二つの加筆を中心に分析を進めることにしよう。

1) ロックが「立派な家庭教師」の資質としてまず第一に要求するのは、育ちの良さである。第93節において彼はこう言う。将来紳士となるべき者を「立派なジェントルマン」に向けて形成するためには、「監督者自身が育ち良き人物で、接する相手、時期、場所の変化に応じた立ち居振る舞いと礼儀正しさ (Civility) の基準を心得て」いなければならない、と。一般に求められている学識ではなく、「良き養育」 (good Breeding) が最優先して求められなければならないのは、「育ち良きジェントルマン」 (well-bred Gentleman) が「立派なジェントルマン」のより本質的な構成要素を成すからである。だがなぜそれをロックは教師の資質の第一位に位置づけたのであろうか。ジェントルマンの資質の中でも「第一に最も必要なもの」 (§135) とされた徳がここで要求されないのはなぜだろうか。

以上の躰の重視ないし徳の軽視はさしずめ次の一文から理解されるように思われる。

「躰は他のすべての良き資質に光沢を与え、彼が接するすべての人の尊敬と好意を獲得させることで有益なものにする。良い躰がなければ、どんな嗜み (Accomplishments) を持っていたとしても、彼はプライドが高い、自惚れの強い、見栄っ張り、愚かな人間としてしか世間に通用しないであろう。育ちの悪い (ill-bred) 人間にあっては、勇氣は野蛮の外観を伴うもので、またそういう評価しか得られない。学識はペダンティックな人間に、機知はおどけ者に、質朴さは田舎者に、気立ての良さはご機嫌取りになる。またいかに良い性質があったとしても、躰を欠いていれば、歪められ、価値を損なわれて、彼には不利益としかならない。否、徳と才能でさえも、それ相応の称賛は与えられはするけれども、人々から快く受け入れられ、行く先々で歓迎されるようになるには不十分である。」 (§93)

ロックによれば、徳は人間が他の人々から愛され尊敬されるようになるために絶対欠かすことのできないものである。だが徳はそれ自体では決してその第一原理としての評価を得るには十分ではない。徳を他人にとって喜ばしいものにし、自分自身にも有益なものにするためには、「良き躰」が備わっていなければならない。「良き躰」とは、他人との交際において「自分自身をうまく処理していくこと」 (§145) である。そしてこの自己の良き管理は「礼儀正しさ」の実践に依拠している。というのは、「礼儀正しさ」とは「他人を傷つけまいとする心配り」 (§143)、「交際において誰に対しても軽視や軽蔑の素振りを見せまいとする配慮」 (§145) に他ならないからである。「礼儀正しさ」がここで社会に生きる人間の一種の内面的な規範として把握されていることに注目しよう。彼がこれをわざわざ精神の「内的な礼儀正しさ」 (inward Civility / internal Civility, §§67, 143) と呼び、「すべての社会的徳の中で最初の人々を最も引き付ける徳」 (§

143) と規定した理由もここにある。

ところで、この内的規範はその具体的な現れとして心地よい表現方法を要求する。だから人々は、その実践にあたってルックスや声、言葉、動作、身振り一切の外的な態度において「上品さ」 (Gracefulness) と「洗練さ」 (Politeness) を身に付け、「その国のファッションや流儀に従って、また彼らの地位や身分に応じて」 (§143) すべての人々に対する一般的な好意と尊敬を表現していかなければならない。個人的な美質である徳が「礼儀正しさ」の実践に依って立つこの関係を、ロックは上記引用に続く箇所ですら主張する。

「良い性質は精神の本質的な富であるが、それを際立たせるのが良き躰である。それゆえ世間に迎えられたいと思う人は、その行動に強さばかりでなく美しさも与えていかなければならない。堅実であること、また役に立つことですら十分ではない。光沢と魅力を与えるのは、万事上品な身の処し方とファッション (a graceful Way and Fashion) である。多くの場合、行いの方がなされた事柄よりもより重要である。」 (§93)

以上の徳に対する優位から、ロックに従えば、「礼儀正しさ」は「家庭教師の手と配慮によって形成されることが最も必要な部分」 (§93) となる。そしてここにおいて、第一版で「自制」という形式的規定を与えられた徳は、「礼儀正しくあること」 (to be civil) と「行儀良くあること」 (to be good-natur'd) という二つの具体的内容をもつに至り、子どもの道徳的な習慣形成は「礼儀正しさ」の教育へと結実していくことになる。我々はここにロックの新たな教育課題の成立を見ることができる。因にここから、第143節における「非礼」 (Incivility) を生み出す四つの資質 (生来の粗野、軽蔑、あら探し、あげ足取り) と、第145節の「反駁」=「不作法」 (Unmannerliness) についての大部の加筆も生み出されてくる。

もっとも誤解のないよう一言述べておけば、

「礼儀正しさ」の教育の強調は、後にチェスターフィールドが息子に繰り返し説いたような「良きマナー」の習得に還元されるものではない¹⁷⁾。ロックは慎重に「良き儀」と「良きマナー」とを区分し、外見の美しさを求めてマナーに磨きをかける当世流行の教育の在り方を批判した。彼によれば、「ありのままの飾り気のない素朴な性質の方が、人為的に作られた上品でない行為 (Artificial Ungracefulness) やさんざん手を入れて悪く固まったわざとらしい表現方法 (studied Way of being ill fashion'd) よりもずっと良い」 (§66) のである。この観点が、インディアンを例にあげてのジェントリの「文明化」に対する批判 (§145) と、「上流階層の人々の間で」見られる「冗談」に対する批判 (§143) とを導き、「上手な話し方」に関する一連の加筆を生み出していくことになる (§§98, 145, 168, 189)。

2) 「良き儀」に加えて次にロックが要求するのは、世間や人間についての知識である。家庭教師は「彼が生まれた時代と、特に彼が生きている国の生活様式、気質、愚行、ごまかし、欠点を良く知っている」人間でなければならない (§94)。ここで要求されている世間の知識は、「人物を正しく判断し、日常業務を賢明に処理する」 (ibid) 能力を表す「知恵」 (Wisdom) の教育と密接に関係している。そしてそれは先の礼儀正しさの教育と相対的な関係にある。というのは、「良き儀」が行動様式において「自分自身をうまく処理していくこと」 (§145) であるとするなら、この世で「自己のビジネスを有能にかつ見通しをもって処理していくこと」 (§140) が「知恵」に他ならないからである。

世間的知恵の教育は、国家社会への奉仕が「不可欠の業務」 (献辞) とされたジェントルマンにとって決定的に重要である。だからロックはそれを徳に次ぐ第二番目に重要な資質として要求した。にもかかわらず、第一版においては、知恵は経験によって得られる他はないという理由で、それについての具体的な言及は避け、もっぱら「知恵の猿真似」としての「狡猾さ」 (Cun-

ning) の予防的教育についてのみ議論していた (§140)。この部分はその後も変更も受けなかったもので、いかなる発展もなかったかのように思われるかもしれない。がしかし、ロックは第三版以降その立場を発展させ、知恵の教育に向けての積極的な議論を展開していた。それも家庭教師の第二の資質について論じたこの第94節において。

知恵の教育がここで論じられるようになったのは、第70節加筆からの当然の帰結であった。というのは、先に見たように、そこで展開された家庭教育の主張は、知恵の教育のために早くから子どもを世間に送り出す実践に対する批判の上に成り立ち、ジェントルマンを本務である世俗世界に向けて教育するにはどうすれば良いかという問題は先送りの状態になっていたからである。未解決のままにされていたこの問題を、ロックは今や自らが推奨した家庭教育の構造の枠内で解決しなければならなかった。だから先の第70節加筆で問題にしたのと同じ実践がここで再び取り上げられる。但しその対応は全く異っている。

1660~1775年間のジェントルマン教育論を分析したバラウアーによれば、社会への直接的な参加によって世間の知識を獲得しようとする考えは、復古期の最も大きな特徴の一つであった¹⁸⁾。実際ロック自らも証言しているように、その実践は当時「普通に行われていた」 (§94)。これをロックはモラリストとしての立場からここでは次のように批判していく。

ロックに従えば、「人生の全過程の中で最も危険な段階である少年期から大人への移行期」に子どもを直接世間に投げ入れて教育していくその方法は、何ら世間知の教育とはなっていない。それどころかむしろ、若者たちの「だらしない行動、浪費、放蕩」を産み出す原因とさえなっている。というのも、社会の「新参者」 (Novice) は、かく在るべきだと教えられ、またその通りに想像していたものとは世間が全く異なるのを見て、「見せかけの友情と尊敬」から彼らに近づ

いてくる遊び仲間——「別種の教師たち」(other kind of Tutors)——からいとも簡単にこう説得させられてしまうからである。

「お前たちが受けてきた訓練や聞かされてきた講義は全く形式的な教育 (Formalities of Education) で、子ども時代を束縛するものでしかなかった。大人の自由とは以前禁じられていたものを大いに羽を伸ばして思う存分楽しむことである」と (§94)。

悪徳を「自由」として提示する彼らの「教育」は、徳の教育の上からもきわめて有害である。なぜなら、彼らは目くらむような実例を若者に提示し、かつ「家庭教師から受けてきた真面目な忠告と自己の理性の勧告に従うことは、(結局は) 他人に支配されることなのだから、そういうものには従うな」と主張して、そうして自らも墮落していきながら、自分たちは今「一人の自立した大人として、自分自身の指図で、自らの楽しみのために」生きているのだと信じ込ませていくからである。ロックは、こうした主張や行動が実は彼ら自身が若者を支配するためのものであることを鋭く見抜いていた。がまた同時に、早くから大人であろうと欲する若者たちが、「家庭教師がこれまで教えた徳の全ての規則に背いて、自分を際立たせることこそ勇敢である」と勘違いして、「最も放蕩な人間」の実例を模倣していく事実も決して見落としてはいなかった。しかしながら何よりも重要なのは、若者がかくも易々と騙され墮落していくのは、「仮面」を「素顔」として提示する世間の教師の罪でも、また世間知らずの若者の罪でもなく、その根本原因は、物事を外面で判断することを教え込んでいる初期の子育てと、世間が本当はどういうものであるのか、また自分は誰から嫌われ、誰から可愛がられるか、調子よく近づいて取り入りながら裏で自分の足元をすくうのは誰か、また世間で出会う人間のたくらみや正体をどこでどのようにして見分ければよいのかということについて——ロックはこれらが「知恵の大きな部分を占めている」と言う——、全く無

知のままにしてきた少年期の教育にこそ求められなければならないとする、ロックの観方である。

こうした社会の現実についての洞察の深まりと教育還元主義的な観点が、経験と観察に委ねられていた第一版の「知恵」の教育の在り方を根本的に変更させ、世間のことを十分に知り尽くした腕のたつ家庭教師の下での積極的な知恵の教育の要求となって現れてくる。

「家庭教師は、生徒に大人の老練さやマナーを教え、職業柄また見かけの上で身に付けているその仮面を剥ぎ取って、そうした外見の根底に存在しているもの〔素顔〕を生徒が見極められるようにしなければならない。……家庭教師はまた、できる限りありのままの姿〔実体〕を示すのに最も役立つ特徴を捉えて、人物について正しい判断ができたり、またちょっとした事柄、特に公式の場でない時や警戒していない時にしばしば現れてくるその人の内面を見通すことができるように習慣付けていかなければならない。家庭教師は世間の本当の姿を知らせて、生徒が人間を実際以上に良く取ったり悪く取ったり、また実際以上に賢明であるとか愚かであるとか決して考えないようにすべきである。」 (§94)

かかる教育は、ロックによれば、「ジェントルマンの職分」である「実務家」に向けて子どもを教育していくことにおいて必要とされるだけではない。「世間 (の悪徳) を防ぐ唯一の垣根は世間を徹底的に知ることにある」ので、それは有徳な人間に向けて形成していく方法としてもより一層必要とされるのだ。この点において、世間に出る前に子どもに社会の実態を徹底的に知らしめる家庭教師は、第三版以降、徳の教育と世間知の教育とを取り結ぶ媒介者として決定的に重要な役割を付与されていく。

おわりに

以上、加筆分析を中心に、第一版から第三版

以降にいたるロックの関心方向の発達や新しい視座の導入について論じてきた。そこでこの最後の章では、この変化を17世紀後半から18世紀前半にかけてのイギリス・ジェントルマン教育の自己変容の問題として展望したいと思う。

すでに述べたように、「草稿」から第一版にかけてのロックの主要な教育的課題は、支配階層としてのジェントルマンを、自らが率先して範となり社会の統合を図っていくことができるような自律的な人間＝市民へと形成していくことにあった。ところが、ジェントルマン支配の安定化の中で当初の秩序維持の切迫感が薄らいでいくと、ロックの関心は、真理や「正義と不正の真の基準を求める」 (§187) といった政治的倫理的な主体の自己構成という観点よりもむしろ、新たに形成された市民の日常生活と人間相互の社会的関係の中で主体を形成すること、つまりジェントルマンを「市民的な交際やビジネスにふさわしく形成する」 (§94) ことへと移行していく。この変化を我々は、「善良で、有用で、有能な人間」から良き徳と世間の知恵を兼ね備えた「礼儀正しい人間」へというジェントルマン像の変化と、文明化された理性的な生活態度や行為形式の教育の強調の中に跡づけてきた。

もっとも、加筆は第一版の構成に従って行われたため、理性的な人間を形成するという初期の方針は根本的な変更を受けなかった。がしかし、加筆におけるこうした力点の変化には、「幸福＝快楽」を人生の一般的な目的とする価値観を所与のものとしつつも¹⁾、消費社会の発展の中でジェントルマン階層の間に蔓延し始めた寛容な子育てや一連の教育実践に、人間が「存在」と「外観」、「人間」と「市民」とに分断され、その結果として無秩序の要素が社会に導入されて、ひいては支配階層それ自体が解体と瓦解の危機に瀕していくのではないかという危機感が潜んでいた。これが、ロックをして支配者としての風格を身に付けようとする同時代の「気取り」に対する批判へと向かわしめ、徳がすでにそれ自身に体现されていて、しかも生きること

に意味と現実性を与えてくれるような行為形式の形成、つまり、内面的な規範であると同時にその外的な存在形態である「礼儀正しい」人間の形成を重要な教育課題として成り立たせていった。ロックが「伊達男」に対抗して訴えた「実務家」は、それが社会的に規定されたところのジェントルマンに他ならないのである。

ところで、以上の教育をロックは一貫して家庭教育に期待した。しかし加筆部分を読めば、彼が子どもを家に閉じ込めて教育していけばそれで十分であると必ずしも考えていなかったことが窺える。消費社会の進展によってこれまで設けられていた家庭生活（私的領域）と社会生活（公的領域）との間の溝は小さくなり、社会に比べて比較的「安全な場所」だとされた家庭はもはやそれ自体では教育にふさわしい場所ではなくなってきていた。世間に全くの無知のままに教育することは、仮に出来たとしても、却って子どもの徳性を失わせ、彼をますます社会には不向きな人間にしていくのだという認識がロックの中で次第に大きくなっていくのである (cf, §§37, 94)。こうした純粹培養型の家庭教育の限界についての自覚が、彼に家庭教師に新たな資質を求めさせ、その役割と機能を増大させていく。

しかしこうして補強されたロックの家庭教育の構造も、当時起こってきていた学校化のうねりが本格化し、やがてジェントルマン教育の定型が完成していくと、彼の要求する家庭教師が現実問題として入手困難なことも手伝って、結局は解体せざるを得なくなっていく。ここに18世紀後半、家庭教育に対する学校教育の優位の主張が台頭してくる。

註

1) ロック (John Locke, 1632-1704) は、友人で下院議員でもあるエドワード・クラーク (Edward Clarke) に、1684年7月19日から1691年3月9日まで、十編の教育助言を書き送った。

2) この加筆によって、当初262頁 (202節) にすぎなかつ

た『教育論』は第五版(1705年)では374頁(216節)へと拡大された(James L. Axtell, *The Educational Writings of John Locke, A Critical Edition*, Cambridge University Press, 1968. p. 15.)。こうした大幅な加筆に、「貧弱」で「自信がない」(献辞)と考えていた作品に完璧を期そうとする態度があったことは確かである。その書が最初匿名で出版され、第三版において献辞に「ジョン・ロック」のサインが、そして第五版で初めて表紙に著者名が記されたのもそうした事情を反映している。だがそれ以上に重要なことは、彼が常に身近にいる人々との関係を自己の価値体系の第一位におき、彼らのその時々の訴えや悩みに積極的に応えていこうとしていたことである。これが彼の教育問題の発展を推し進める要因になっている。なお、今回筆者が比較参照したテキストは、1693年発行の第一版とアクステルの「批判版」所収の第五版である。本文中のロック『教育論』からの引用はすべて第五版の節ナンバーに従った。

- 3) 『教育論』の発展過程を論じたマッソンによれば、第一版は主に「草稿」と「書簡」から半々の比率で構成され、教育理論の多くは前者に負っていた。Cf. M. G. Mason, 'How John Locke wrote <Some Thoughts concerning Education>', *Paedagogica Historica*, 1, 2, 1961. pp. 244-290.
- 4) 例えば, Peter Gay(ed.), *John Locke on Education* (1964), John W. Yolton, *John Locke and Education* (1971), James L. Axtell, *A Critical Edition* (1968) は『人間知性論』との関わりから、また最近出版された N. Tarcov, *Locke's Education for Liberty* (1984) は『統治論』との関わりから『教育論』に接近している。
- 5) この点については、拙稿「18世紀ジェントルマン教育の変容—家庭教育から学校教育へ—」『教育学研究』第53巻, 第1号, 1986年。を参照。
- 6) 角山栄編『産業革命と民衆』河出書房新社, 1975年。角山栄・川北稔「路地裏の大英帝国——イギリス都市社会史」平凡社, 1982年。川北稔「洒落者たちのイギリス史」平凡社, 1982年。川北稔「工業化の歴史的前提—帝国とジェントルマン」岩波書店, 1983年。天川潤次郎「18世紀イギリスにおける「消費社会」の成立について」『経済学論究』第38巻, 第1号, 1984年。1—30頁。喜安朗・川北稔『大都会の誕生』有斐閣, 1986年。村岡健次・鈴木利章・川北稔編『ジェ

ントルマン・その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房, 1987年。水谷三公『英国貴族と近代』東京大学出版会, 1987年。なお「衍示的消費」の概念については、ウェブレ『有閑階級の理論』(小原敬士訳, 岩波文庫)を参照。

- 7) Ph. アリエス『<子供>の誕生』(杉山光信・恵美子訳, みすず書房, 1980年)参照。
- 8) 例えば, ストーンは18世紀に親子関係や子育て様式に「著しい変化」があったと主張し、その転換点をロックに求める。彼に従えば、ロックの『教育論』は、絶対主義国家を支えていた家父長的権威主義からの解放と、「意志を破砕する」というピューリタンの厳格な子育て様式からの転換を訴えた画期的なモニュメントであった(L. Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800*. Widenfeld and Nicolson, London, Pepr. 1979)。しかしポロックによれば、子に対する親の態度においてそうした変化は見られない(L. A. Pollock, *Forgotten Children*, 1983)。
- 9) キングの表によると、バロネットとナイトが合わせて1,400家族であったのに対し、エスクワイアおよびジェントルマンはそれぞれ3,000家族, 12,000家族を数えていた。P. ラスレット『われら失いし世界』(川北・指・山本訳, 三嶺書房, 1986年), 47—48頁。
- 10) H. J. ハバカク『十八世紀イギリスにおける農業問題』(川北稔訳, 未来社, 1967年)参照。なお、近年の歴史学会における「ハバカク・テーゼ」をめぐる諸問題に関しては、村岡・鈴木・川北編『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』(1987)所収の川北論文「名譽革命期地主社会の変容とマリジ・セツルメント」が要領よく整理してあるので、それも同時に参照。
- 11) ロック『利子・貨幣論』東京大学出版会, 1978年, 28—29頁を参照。
- 12) 例えばジェフェリは、これをひとつの典拠にロックを「児童中心主義教育の創始者」と位置付けた。M. V. C. Jeffreys, *John Locke ; Prophet of Common Sense*, 1967. p. 51.
- 13) 以上の点については、佐々木孝次「スノビズム」『書齋の窓』No.354, 1986年4月号から貴重な示唆を得た。
- 14) Cf. G. C. Brauer, *The Education of a Gentleman*, 1959., N. Hans, *New Trends in Education in the Eighteenth Century*, Routledge & Kegan Paul,

- 2nd ed., 1966., G. F. Musgrove, 'Middle-Class Families and Schools, 1780-1880 : Interaction and Exchange of Function between Institutions', P. W. Musgrave ed. *Sociology, History and Education*, London, 1970. pp. 117-125.
- 15) cf, J. Cannon, *Aristocratic century ; The peerage of eighteenth-century England*, 1987. Ch. 2.
- 16) 井野瀬久美恵「サー・ウォルター・ローリーの『息子への訓戒』」（前掲、『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』所収）参照。
- 17) 拙稿「チェスターフィールド書簡にみる18世紀英国貴族の教育」『金沢大学教育学部紀要』第36号，1987年，1—20頁を参照。
- 18) cf, G. C. Brauer, op. cit., Chap. IV.
- 19) ロック自身，第143節の加筆でこう言う。「すべての人間が求めている幸福は快樂にあるので，なぜ礼儀正しい人が有用な人よりも広く受け入れられるのか容易に分かるであろう」と。